院政末期・鎌倉初期の和化漢文訓読資料における漢音形

佐々木　勇

一、本稿の目的と対象資料

本稿の目的は、院政末期～鎌倉初期の和化漢文訓読資料における漢音形を、調査・分析することである。

対象として、次の四点を選ぶ。

東寺観智院本『注好選』仁平二年（一一五二）点

高野山西南院蔵『和泉往来』文治二年（一一八六）点

高山寺本『古往来』院政末期～鎌倉初期点

金剛寺蔵本『注好選』元久二年（一二〇五）点

声点から知られる声調の分析において、右四文献の声調は、同期の仏書訓読資料よりも日本語化されたものであったことが判明した。その四文献内では、東寺観智院本『注好選』仁平二年（一一五二）点＜金剛寺蔵本『注好選』元久二年（一二〇五）点＜高山寺本『古往来』院政末期～鎌倉初期点＜高野山西南院蔵『和泉往来』文治二年（一一八六）点の順に、漢音声調の日本語化の程度が大きい、と考えられた（これについては、別稿で述べる予定である）。

本稿では、仮名音注および類音字注（以下、煩を避け、単に「仮名音注」と呼ぶ）から推測される漢音形についても、その漢字音日本語化の程度において、声調と同様のことが言えるものか否かを調査することを目的とする。

二、先行研究における指摘と本稿の研究方法

1．先行研究における指摘

この四文献の中、『和泉往来』と高山寺本『古往来』とは、ともに往来物であるため比較されることが多く、その漢字音についても、すでに研究が公表されている。左に、その主な論文名を掲げる。

論文1．小林芳規「国語史料としての高山寺本古往来」（『高山寺本古往来表白集』（高山寺資料叢書第二冊、一九七二年、東京大学出版会）所収。

論文2．（同右）「和化漢文における口頭語資料の認定」（『鎌倉時代語研究』第十二輯、一九八九年七月）。

論文3．沼本克明「高山寺本古往来の音韻」（論文1と同書に所収）。

論文4．（同右）「変体漢文訓読に於ける字音語の性格」（『信州大学人文科学論集』第七号、一九七三年三月。後、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（一九八二年、武蔵野書院）に収載。）

右の先行研究では、漢字音日本語化の程度について、呉音は漢音より日本語化の程度が大きく、漢音の中でも、字音直読資料・漢籍訓点資料＜和化漢文＜日常口頭語の順に、日本語化の程度が大きくなっていく、と捉えられている。

これは、常識的に首肯されるところである。

そして、同じく和化漢文である『和泉往来』と高山寺本『古往来』とでは、『和泉往来』の方が漢字音日本語化の程度が大きいことが、論文2で指摘されている。[1]

なお、東寺観智院本および金剛寺蔵本『注好選』に関する漢字音研究は、管見に入らない。

2．本稿の研究方法

右の先行研究に導かれ、別稿では、声調の分析から、漢籍訓点資料・字音直読資料＜仏書訓読資料＜和化漢文＜日常口頭語の順に、日本語化の程度が大きくなっていくことを述べた。

そして、本稿の対象とした上記四文献は、東寺観智院本『注好選』＜金剛寺蔵本『注好選』＜高山寺本『古往来』＜高野山西南院蔵『和泉往来』の順に、漢音声調の日本語化の程度が大きい、と考えられた。

本稿では、仮名音注の面から、右四文献の漢音について検討を加える。[2]

そのため、まず、各資料の分量および字音点加点数を確認する。

次に、仮名音注から判断される各文献の漢音読・呉音読の割合を調査する。

そして、最後に、字音注の表記法・推定される音価を比較する、という方法を採る。

三、対象資料の分量と字音点加点数

1．資料の分量

それぞれの文献の分量は、次の通りである。（全体の分量が少ない文献から多い文献の順に並べる。）

高野山西南院蔵『和泉往来』　一行一七～二〇字程度、本文　二五一行。

高山寺本『古往来』　一行一四～一八字程度、本文　四三九行。

金剛寺蔵本『注好選』　一行一八～二〇字程度、本文　七四九行。

東寺観智院本『注好選』　一行二〇～二二字程度、本文一三二七行。

右の如くであって、『和泉往来』がもっとも全体量が少なく、東寺観智院本『注好選』がもっとも多い。

2．字音点加点数

別稿では、右四文献における字音点加点数を調べた。

その結果のみ、表1として、左に掲げる。

表1

	仮名音注	声点	計	仮名音注加点率
和泉往来	一〇九九	三	一一〇二	九九・七％
古往来	五七一	五七	六二八	九〇・九％
金剛寺本注好選	一一一	五三	一六四	六七・九％
観智院本注好選	一一〇	一四六	二五六	四三・〇％

仮名音注の数は、右のとおり、全体の分量とは逆の順に多い。字音注の全体数（仮名音注と声点との総計）における仮名音注加点数の割合を、「仮名音注加点率」と仮に呼び、それを算出すると、右表の左から右の順に高率となっており、仮名音注の密度の差が明確である。

すなわち、観智院本『注好選』における仮名音注の密度は低く、[3]これと対照的に、丁寧な仮名音注加点をしているのが『和泉往来』である。金剛寺本『注好選』および高山寺本『古往来』は両者の中間である。

このような相違を見せるものの、右四文献は、仏書訓読資料における仮名音注加点率よりも、総じて高い。

峰岸明は、高山寺蔵『史記』の訓点加点態度について分析・考察した上で、「一般的に、訓点記入の行なわれる状況について」、次の四段階が設定できる、とした。[4]

（1）非常用の漢字に非定訓を加点する、次に

（2）非常用の漢字に定訓を加点する、

（3）常用の漢字に非定訓を加点する、更に、

（4）常用の漢字に定訓を加点する

そして、「現存諸点本に観察される訓点の粗密には、それらのどの段階まで訓点を加えようとしたかという加点者の加点態度が反映されている」という仮定を示した。

これは、主に和訓の調査に基づいて述べられたものであるが、「音読の場合についてもこれと同様に理解することができると思う。」と記されている。

言われる通り、字音の場合も、密な加点本は、常用の漢字についての音をも加点することになる。そのような加点は、当該漢字音に対する知識が乏しい者によるため、あるいは、そのような層の人々を読者として想定していたためになされた、と考えることができる。

これが当たっているならば、和化漢文訓読資料の漢字音は、仏書訓読資料よりもさらに非規範的なものであったこととなる。また、本稿対象資料間では、『和泉往来』に記された漢字音は非規範的なものであり、観智院本『注好選』のそれは、四資料の中でもっとも規範的なものであることになる。

四、対象資料における漢音・呉音の割合

この四資料の漢音読・呉音読の割合は、別稿において調査し、その結果を示した。

結果は、いずれの文献も、漢音読を中心としながらも呉音読を混

じ、その呉音読例の割合は、観智院本『注好選』＜金剛寺本『注好選』＞『古往来』＜『和泉往来』の順に多くなる。

先に指摘した如く、先学によって、呉音は漢音よりも日本語化の程度が大きいことが明らかにされている。よって、呉音読を多く交える資料の漢音は、呉音を混じえることの少ない資料の漢音よりも、日本語化の程度が大きいことが推測される。

ただし、別稿では、声点が示す声調をも判断材料とした。

そこで、ここでは、各資料における漢音形・呉音形の割合を、仮名音注のみで判断してみる。

1. 高野山西南院蔵『和泉往来』文治二年（一一八六）点

本資料の漢音・呉音の割合は、論文4で、語単位で次の数が出されている。

漢音読—156例、呉音読—74例、混読—6例、漢呉不明—356例

ここでは、単字につき、仮名音注によって、漢音読例、呉音読例、漢呉同音読例、判定不能例、に分けて数を数えてみる。

各漢字の漢音形・呉音形は、『三省堂　五十音引き漢和辞典』（二〇〇四年、三省堂）に示したものに依った。

なお、「判定不能例」には、略記例、虫損による判読不能例、誤写・誤認かと思われる例、および呉音の確例が得られない例を含む。

この方法によって認定した各漢字の漢音読例・呉音読例・漢呉同音例・判定不能例を数えると、左の数となる。

漢音読例	二八七例	（二六．一％）
呉音読例	一五一例	（一三．八％）
漢呉同音例	五〇八例	（四六．二％）
判定不能例	一五三例	（一三．九％）
計	一〇九九例	（一〇〇．〇％）

2. 高山寺本『古往来』院政末期～鎌倉初期点

本資料についても、右と同様な方法で、漢音読例・呉音読例・漢呉同音例・判定不能例に字音点加点例の全例を分けてみた。

漢音読例	一四三例	（二四．四％）
呉音読例	九四例	（一六．〇％）
漢呉同音例	二八四例	（四八．五％）
判定不能例	六五例	（一一．一％）
計	五八六例	（一〇〇．〇％）

3. 金剛寺本『注好選』仁平二年（一一五二）点

同様に数えると、左の如くになる。

漢音読例	四五例	（四〇．六％）
呉音読例	二〇例	（一八．〇％）
漢呉同音例	二九例	（二六．一％）
判定不能例	一七例	（一五．三％）
計	一一一例	（一〇〇．〇％）

4. 東寺観智院本『注好選』仁平二年（一一五二）点

本資料の仮名音注加点例を同様に分類すると、次の数となる。

漢音読例	四四例	（四〇．〇％）

呉音読例　一一例（一〇・〇％）
漢呉同音例　三三例（三〇・〇％）
判定不能例　二二例（二〇・〇％）
計　一一〇例（一〇〇・〇％）

5．四資料の比較

右のとおり、四資料の仮名音注加点数が大きく異なるため、比較は難しい。また、仮名音注のみを判断材料として漢音・呉音の判定を行なったため、いずれの資料においても漢呉同音例が多くなり、各資料の差が不明確となっている。

しかし、『和泉往来』の呉音読例が仮名音注全体の一三・八％、高山寺本『古往来』のそれは一六・〇％、金剛寺本『注好選』は一八・〇％であるのと比べて、観智院本『注好選』の呉音読例の割合は一〇・〇％と低い。

ただし、これは、偶然の結果かも知れない。

そこで、観智院本『注好選』と『和泉往来』・高山寺本『古往来』・金剛寺本『注好選』とで、同一字に音注が存する例を比較してみる。

すると、観智院本『注好選』で漢音注が加点されている漢字に、『和泉往来』・『古往来』で呉音注が付されている例が、次の表2のように存する（金剛寺本『注好選』では、左の諸字の加点例には、観智院本と同じく漢音が加点されていた。／は、その資料に当該漢字への仮名音注加点例が無いことを示す。（　）内は、用例の所在である）。

表2

東寺観智院本『注好選』	高野山西南院蔵『和泉往来』	高山寺本『古往来』
望舒（84.10）	本望（30）悕望（191）	所望（6）
孝（去）明（10.04）	分明（96）	明朝（103）
郭巨（15.06）	巨川（225）	巨（127）
許（平）牧（入修羅）（22.10）	牧宰（238）	／
方氣（44.07）	氣色（31）	／
孝（平）尼（上）（13.09）	宣尼（137）	／
軽清（42.10）	／	軽重（72）

逆に、観智院本『注好選』で呉音でありながら、『和泉往来』または『古往来』で漢音が付される漢字は、『和泉往来』には存在せず、高山寺本『古往来』に、次の二例が存するのみである。

東寺観智院本『注好選』　高山寺本『古往来』
元（去）卿（10.01）　元（平）正（287）
牧童（71.10）　披［牧］童（138）

よって、やはり、『和泉往来』および高山寺本『古往来』に比して、観智院本『注好選』の方が呉音読例が少ないと言えよう。

論文4（沼本論文）では、楊守敬旧蔵本『将門記』一〇五〇年～一〇八〇年頃点、真福寺本『将門記』承徳三年（一〇九九）点、『和泉往来』、および高山寺本『古往来』を比較した結果、「総じて、時

代が下がるにつれて呉音→漢音の交替が多くなり、漢音の勢力が増加するように思われる。」（一一二六頁）とされている。

しかし、東寺観智院本『注好選』は、『和泉往来』および高山寺本『古往来』よりも加点時が早い。

また、一二〇五年点の金剛寺本『注好選』における漢音読の比率も、観智院本『注好選』一一五二年点と同程度である。

よって、右四資料における呉音読・漢音読の比率は、時代の観点では説明できない。

右の結果は、『注好選』二本が、漢音形を意図的に加点したために生じた、と考えることができる。しかも、呉音読と漢音読とが異なる漢字への漢音注加点例が、古往来二本と比較して、多いということになる。

この類例は、院政・鎌倉時代の表白文への加点について、指摘されている。[5] 院政・鎌倉時代の表白文には、「僧侶の日常常用音（＝呉音）から外れた漢音読語」への字音注加点が多く、それは、「導師たる僧侶にとって、朗唱上特に留意すべき箇所に、誤読回避のため多く音注が施された結果とみることができる。」との解釈が示されている。

本稿で採り上げた四文献も、寺院に伝えられるものであり、書写・加点者は僧侶であったと考えられる。

その僧侶が、多く用いていた呉音とは異なる漢音読例に、特に意をはらって加点することは、充分考えられるであろう。『注好選』二本は、古往来二本と比べて、その意図が明確であり、徹底していた、と見ることができよう。

ただし、呉音読例の混入が最も少ない観智院本『注好選』であっても、仮名音注から判定できるものだけでも、呉音形が全体の一割存する。この呉音読の割合は、字音直読資料・漢籍訓読資料に比して呉音読例が多い仏書訓読資料よりも、さらに高いものであることを確認しておきたい。

その範囲で、呉音読の多い古往来の字音は日本語化の程度が大きく、漢音読の多い『注好選』はその逆であることが予測される。

以下、音形の分析から、この点を調査する。

五、対象資料における音形

『和泉往来』および高山寺本『古往来』の音形については、先行研究ですでに分析されている。その先行研究によって、『和泉往来』と高山寺本『古往来』とでは、『和泉往来』の方が漢字音の日本語化の程度が大きいことが言われている。本稿の筆者の調査でも、この点は変わらない。そのため、ここでは先行研究との重複を避け、さらに注目すべき点についてのみ触れる。

1. 高野山西南院蔵『和泉往来』文治二年（一一八六）点の音形

（1）拗音の表記

論文4では、拗音表記について、「いわゆる拗音の直音表記が顕著である」ことが言われている。

指摘のとおり、本資料では、同時代の他資料では「ショク」「シヨウ」と加点される歯音・半歯音鍾韻字も、次のように加点され、

ショの例が無い。

潤潺（20）　先縱（137）　例前蹤（4）　縱容（10）　舊從（21）

松花（127）　松飡（156）　狭鍾（27）　鐘愛（20）

このように、ショをソとするのは、仮名文に見られる表記法である。

また、「葛供」(250) の例は、右と同一の表記法が、鍾韻牙音字に及んだ例であろう。

加えて、拗音表記に漢字による類音字表記が多いことも、論文4で述べられている。[6]

音注に見られる類音字は、左のものが全例である。

火・上・鬼・尺・生・元・源・久・出・小・品・丁・五・天・王

このうち、「火・上・鬼」は、院政期における他の訓点資料にも比較的良く用いられ、「尺・生」も他資料に使用例が存する。[7]

しかし、拗音以外の音表記例を含め、「丁・五・天・王」は、院政期訓点資料における一般的な類音字とは言えない。これらは、和文あるいは平安初期古訓点資料・『倭名類聚抄』などの中に見られる類音字[8]と一致する。

その和文資料には、訓点資料にも見られた「火・上」の類音字も存する。

よって、『和泉往来』の類音字表記は、全体として和文のそれに近い、と言える。[9]

（2）重箱読み・湯桶読み例

本資料には、訓点から明確なものだけでも、次の、重箱読み・湯桶読みの例がある。

堂上（194）　曳干料（214）

さらに、「様」を字音と見れば、「薄様」(89) も湯桶読みの例となる。

これらは、漢字音が和語と同様な発音であったからこそ生じたものである。

（3）字音語・字音注への踊り字使用例

本資料では、同時代の他文献同様、和訓の訓点に踊り字を用いる。例の一部を左に掲げる。

稍（145）　何（137・234・235）　頂（149）　但（237）　叩（156）

協（157）　聊（133）　品〻（90）　難辞（125）　抑〳〵（3・125）

稍（28）　泊〻（69）　適（104・113）　弥〳〵（129）　屢〳〵（149）　且（158・224）　悉（193）　品〻（223）　等。

しかし、字音の場合は、直上と同じ仮名連続となる時も、それを繰り返し表記する。左に、本資料の例を挙げる。

事〻（33）　芬〻（51）　嫋〻（51）　翩〻（73）

緩〻（74）　漫〻（74）

このように丁寧な表記例は、他の院政期訓点資料には希であろう。そして、本資料に注目される例として、字音を踊り字によって繰り返した、次の例がある。

溶〻（74）　蜜〻（33）　遠〻（229）　近〻（229）　寝〻（230）

興〻（231）　眇〻（236）　飄〻（236）　様〻（90）

右のように、和語の繰り返しに用いる踊り字と同じ符号を字音に

用いた加点者にとって、その字音語の発音は和語の発音と大きく変わらなかった、と考えられよう。[10]

2. 高山寺本『古往来』院政末期～鎌倉初期点の実態

(1) 拗音の表記

高山寺本古往来では、拗音のショ・ショウ表記例が存することが、先行研究で指摘されている。

類音字表記例は、桃花(ヤ)(322)・呵嘖(セ)(259)の二例にすぎない(ただし、「嘖」は呉音)。

本資料に類音字表記例が少ないことについて、論文3は、日本漢字音史における拗音表記は、類音字表記から仮名表記へという流れであり、「本資料はその時代的様相を反映し」ている、と記す。

しかし、『和泉往来』と比較した場合、単に時代差のみでは説明できない開きがある。

右の『和泉往来』における考察と合わせると、『和泉往来』に比して、本資料が和文の世界から遠いことも、類音字表記例が少ないことの一因ではないか、と考えられる。

この推測は、『和泉往来』よりも加点の早い観智院本『注好選』に類音字表記例が二例のみであること(後述)から、補強される。この点からも、比較四資料間には、時代差以外の原因による差が存すると見られる。

(2) 重箱読み・湯桶読み例

本資料にも、当時の訓点資料に希な、いわゆる重箱読み・湯桶読みが存することが、すでに指摘されている。[11]

中でも、「面々責陵(ニセメレウンテ)色々徴取(ニハタリトル)」(130)は対句であって、「徴取(ハタリトル)」の対となる「責陵(セメレウシテ)」の「陵(レウシテ)」が、字音語と意識されていたものかどうか、疑わしい。

(3) 字音語・字音注への踊り字使用例

本資料本文では、「感悦(カム)〳〵」(180)「幸甚〳〵」(395・398)「喜悦〳〵」(396)のように、同時代の他文献において、和語の繰り返しに用いられる踊り字「〳〵」によって、漢語を繰り返している箇所がある。

ただし、本資料においても、これ以外の箇所では、漢字は、「〻」によって繰り返しを示している。

訓点では、同一字音を繰り返し注したものは、次例のみである。

多〻(タ〻ニ)(113)

『和泉往来』の項で指摘したとおり、院政末期～鎌倉初期の訓点本には、字音を踊り字で繰り返すことは、一般的ではなかったものと思われる。本資料において、同一字音の繰り返しを注した例は、右一例のみである。そのため、明言はできないものの、漢籍訓読資料に比すれば、本資料が和語の世界に近いことを示すものであろう。

(4) 濁声点加点率

本資料における濁声点は、日本漢音の頭音がいわゆる濁音であった漢字のすべてに加点されているわけではない。

今、『韻鏡』次濁字の内、頭音濁音と考えられる漢字への声点加点例を抜き出すと、左の通りである。

濁声点加点例

頑(ク〻ン)(去濁)愚(335)　親昵(ナン)(平濁)(402)　魚網(ハウ)(平濁)(438)　寂寞(ハク)(上濁)(5)

无(平軽濁)頼(310)　生涯(平濁)(387)

単声点加点例

慈顔(平)(392)　元(平)正(287)　亡(平)弊(125)

これは、当時としては、比較的高率な濁声点加点である。[12] しかし、金沢文庫本『群書治要』経部鎌倉中期点等の濁声点加点から見ると、徹底していない。

(5) 連　濁　例

本資料には、論文1に指摘される、次の連濁例が存する。[13]

春秋(入濁)(4)　奉士(平濁)(12)　星(平軽)霜(平濁)(413)　推鑒(上濁)(379)

漢字音の日本語化事象である連濁は、漢音読資料においては原則としてみられないことが指摘されている。[14]

よって、『和泉往来』と比較すれば規範的な本資料も、字音直読資料・漢籍訓読資料に比すれば、日常口頭語に近い、と言わねばならない。(なお、『和泉往来』には声点加点が希であるため、連濁については考察できなかった。)

3. 金剛寺本『注好選』元久二年(一二〇五)点

右二往来の先行研究にならって、金剛寺本『注好選』について調査してみる。

別稿で見た本資料の声点は、高山寺本『古往来』よりも、伝統的な漢音声調を示していた。

また、漢音読の比率が高いことから、高山寺本『古往来』よりもさらに規範的な仮名音注がなされていることが予測される。

よって、以下、高山寺本『古往来』と比較しつつ、金剛寺本『注好選』の仮名音注を検討する。

(1) 拗音の表記

①類音字表記

本資料中に、類音字表記は存しない。

②割音表記

高山寺本『古往来』には、「衆」等の形で、いわゆる割音にしない表記例が存することが指摘されている(論文3)。

本資料では、それにあたる例は、呉音読の「梁|充(平濁)州」(四オ3)のみで、他はすべて、次の通り割音表記されており、伝統的な漢音の表記法に一致する。

鬱(平)子(上)(二一ウ5)　窮(左)(上)蒼(左)(平)(二ウ1)　厩(左)(五三ウ4)　流(上)(八オ5)　幽信(四四ウ4)　幽(平)天(二ウ3)

③鍾韻・蒸韻の仮名表記

日本漢音では、これらを「㋑ヨウ」で表記するのが原則である。しかし、和泉往来では、「㋓ウ・ヨウ」で表記されている(論文4)。

本資料では、加点例が少なく、この項目に該当する漢音の仮名音注は、次の例のみである。

顒顒(二〇オ3)

「㋓ウ・ヨウ」の表記例は、存しない。

(2) 重箱読み・湯桶読み例

本資料中に、いわゆる重箱読み・湯桶読みと判断できる加点例は、存しない。

(3) 字音語・字音注への踊り字使用例

字音注において、同音を繰り返す例は、右にも掲げた、次の一例のみである。

顒顒（キヨ〳〵タル）（二〇オ3）

これは、和語「弥（イヤ）〳〵」（四一オ3）「適（マ）〳〵」（七オ2）と同一の表記法である。

（4）濁声点加点率

高山寺本『古往来』と同様に、『韻鏡』次濁字の内、頭音濁音と考えられる漢字への声点加点例を抜き出せば、左の通りである（当該字の訓点のみ記す）。

濁声点加点例

萬（去濁）物（一オ2）　二（平濁）儀（一オ3）　仲尼（平濁）（二ウ6）

娥（カ）（平濁）影（四八ウ1）　梁充（シユウ）（平濁）州（四オ3）

得　樂（クラ（マ））（平濁）止（九オ7）

単声点加点例

（無し）

右の通り、本資料は、日本漢字音でいわゆる濁音であった漢字にはすべて濁声点を加点している。濁音表示率が高いことは、日本語音として取り込まれた漢音を正確に示そうとすることである、と解釈できる。

（5）連濁例

本資料中で、連濁例かと思われるものは、次の一例のみである。

論衡（カウニ）（平濁）（四ウ1）

「衡」は、『蒙求』第九句で、「匡衡鑿壁」として見られ、長承点・東洋文庫蔵本鎌倉時代中期～後期点・天理図書館蔵康永四年書写本・龍谷大学図書館蔵本室町期点などの古訓点では、濁声点が加点されている。当時、連濁して読まれることが一般的であったのであろう。[15]

本資料の声点加点数は、高山寺本『古往来』とほぼ同数であった。その高山寺本『古往来』には、四例の連濁例が存した。それと較べて、連濁例一例のみである本資料は連濁例が少ない、と言えよう。

連濁は漢字音の日本語化現象であるから、本資料は、高山寺本『古往来』に比して、日本語化の程度が低い。

（6）m・n韻尾の表記

三内撥音尾の仮名表記は、次のとおりである（虫損・欠損・誤写例は除外した）。

	ム表記	ン表記	零表記
m韻尾字	四	一	〇
n韻尾字	〇	九	二

これも、例数が少なく、傾向を見出しがたい。

ただし、高山寺本『古往来』では、m韻尾をンで表記する例とn韻尾をムで表記する例とが、一例ずつ指摘されている（論文3。筆者の調査でも同じ）。

また、高山寺本『古往来』には、n韻尾をツで表記した「寸断（ソンタツス）」（196）の例がある。これに相当するのが、本資料における次の零表記例であろう。

鄰（エン）（平）（四オ7）　怨（エヲ（ヱ））（二〇オ6）

高山寺本『古往来』の例も、この二例も、nが後続音と密接に発音されたため、弱化し、舌内入声音表記と同一の表記、または省記

されたものであろう。

このm・n韻尾の表記については、高山寺本『古往来』との間に、明確な差を認めがたい。

（7）三内入声音尾の表記

本資料における入声字の仮名表記例は、喉内入声の例のみである。

阿図（去）格（ク（七））（一オ8）稲穀（コクク）（一五ウ4）

熟（ス（ク（七））（入）（五オ3）方濁（タク）（三ウ1）清濁（セイタク）（三オ8）

牧（ホク（七））童（三〇オ2）

全例クの例であるのは、全体数が少ないためであろう。

（8）開合の混同例

中国中古音における合口字のうち、日本漢字音において開合が問題となる仮名音注加点例は、喩母・影母の次例のみである（呉音読例も掲げる）。

怨（エン（去））（二〇オ6）軒（カン（去））轅（エン（上））（四オ4）営（キウ（上））州（四オ7）

右の通り、第三例の呉音読例を含め、古用の通りワ行の仮名で表記されている。[16]

一方、開口喩母字を「ヱ―」と加点した次の例が有る。[17]

美艶（エン（去））（二八ウ2）

しかし、他の開口字音注例は、次のように、「エ―」となっている（呉音読例を含む）。

英満（エイ）（二〇ウ5）易妖（エウ）（平）（四オ7）鄰（エン）（平）（四オ7）

幽州（エウ）（四オ7）宴（エンシ）（二六オ4）

このように、「エ」と「ヱ」とは基本的には区別されている。よって、右の「艶（エン（去））」は、開合の混同例となろう。

以上を総合的に見ると、本資料は、高山寺本『古往来』よりやや規範的な漢音を反映している、と言えよう。

4．東寺観智院本『注好選』仁平二年（一一五二）点

東寺観智院本『注好選』仁平二年点の声点は、高山寺本『古往来』・金剛寺本『注好選』よりも、伝統的な漢音声調をよく反映している（別稿、参照）。

また、仮名音注の加点密度および漢音読の比率から、仮名音注も、高山寺本『古往来』および金剛寺本『注好選』よりも、さらに規範的なものであることが予測された。

その観智院本『注好選』仁平二年点の仮名音注では、これまでの検討項目は、以下のとおりである。

（1）拗音の表記

①類音字表記

類音字表記に、次の二例が有る。（当該字の訓点以外は省略する。なお、用例中の「ン1」は一画のンを、「ン2」は二画のンを示す。以下同じ。）

蒙恬（ケン1（平））（37.04）顓頊（ケン（入））（5.11）

「火」は、鎌倉時代に入っても用いられるが、「玉」は院政期としては希な例となろう。

②割音表記

本資料では、日本語音価の問題と関連して同列に扱えないサ行音（収成（43.08））を別にすれば、その例は、「祝融（ユウ）（平）」（5.04）のみである。

他はすべて、次の通り、いわゆる割音形で表記されており、伝統的な漢音の表記法に一致する。

祝融(5.04)　蝸牛(平濁)(94.11)　憂軟シテ(19.10)

劉(平)殷(17.07)　劉縞(39.10)　酉(上)夢(33.10)

③鍾韻・蒸韻の仮名表記

本資料では、次の如く、加点例が少ないものの、和泉往来に見られる「㊥ウ・ヨウ」の表記例は無い。

鍾韻　朱寵(11.02)　顓頊(入)(5.11)

蒸韻　蒔殖(107.03)

(2) 重箱読み・湯桶読み例

本資料には、該当例がない。

(3) 字音語・字音注への踊り字使用例

これも、本資料中に例を見出せない。[18]

(4) 濁声点加点率

他資料と同様に、『韻鏡』次濁字の内、頭音濁音と考えられる漢字への声点加点例を抜き出せば、左の通りである（当該字の訓点のみ記す）。

濁声点加点例

元(去濁)卿(10.01)　呉(平濁)(14.01)　白元(去濁)(12.08)

許牧(入軽濁)(22.10)　蝸牛(平濁)(94.11)　帝尭(平濁)(6.04)

張儀(平濁)(11.11)

単声点加点例

顓頊(入)(5.11)　閔(平)騫(平)(14.12)

単点加点例の第一例は、「玉」によって濁音であることを示している。

よって、本資料の濁音表示率は、高山寺本『古往来』よりも高い。

(5) 連濁例

本資料中で、連濁例かと思われるものは、次の一例のみである。

匡(平)(平軽)衝(平濁)(7.11)

この「匡衝穿壁」の題のもとに記される「前漢東海人」は、「匡衡」であるから、本文に誤写が存する。

本資料の声点加点数は、高山寺本『古往来』の二・五六倍であった。その高山寺本『古往来』には、四例の連濁例が存した。右に掲げた固定化した連濁例（金剛寺本の項、参照）一例のみである本資料は、高山寺本『古往来』と較べて、連濁例が少ない。

(6) m・n韻尾の表記

三内撥音尾の仮名表記は、次のとおりである。

	ム表記	ン1表記	ン2表記
m韻尾字	二	一	○
n韻尾字	一	一三	一

これも、例数が少なく傾向を見出しがたい。ただし、高山寺本『古往来』よりも、規範的な表記がなされていることを読み取ることはできる。

(7) 三内入声音尾の表記

k入声　「玉」の類音字表記以外、全例、クまたはキで表記されている。

t入声　黠恵(89.05)　括(44.12)　以上、ツ表記例のみである。

p入声　フ表記　二例、ウ表記　二例。

これに対して、高山寺本『古往来』には、入声音の促音化例あるいは撥音と同じ符号による表記例が指摘されている。

しかし、本資料には、そのような例は見られない。

（8）開合の混同例

中国中古音の合口字のうち、日本漢字音で合口表示することが一般的であった漢字は、本資料ではいずれも合口表示がなされている（呉音読例も掲げる）。

往（ヲウ）（38.03）　榮（ヱイ）（9.12）　桓（クワウン1）（去）（9.12）　完（クワウン1）（去）（110.04）

郭（クワク）（15.06）　恵（クヱイ）（31.01）　元（クヱン2）（12.08）　玄（クヱン1）（42.10）

元（クワン1）（去）（10.01）　幻（クヱム）（平）（8.02）

逆に、開口字を合口表記した例も、皆無である。

この点、開合の混同例が指摘されている『和泉往来』・高山寺本『古往来』および金剛寺本『注好選』よりも、規範的である。

以上、右の諸項目において、先の三資料に比して、本資料は規範的な表記がなされている。

（2）（3）の項目に、該当例が存しないのは、本資料の訓点加点数が少ないための偶然の結果かとも思われる。

しかし、以上の検討結果から考えるに、これら、字音の日本語音化例が本資料に表われないのは、本資料の表記規範力が強いためである、と考えられる。

5. 四資料の比較

右のとおり、字音の仮名表記およびそれからうかがえる音形の面から、東寺観智院本『注好選』＜金剛寺本『注好選』＜高山寺本『古往来』＜高野山西南院蔵『和泉往来』の順に、日本語音化の程度が大きくなることが確認できた。[19]

六、むすび

本稿の目的は、院政末期～鎌倉初期における和化漢文訓読資料の漢音形を、調査・分析することであった。

対象資料として、東寺観智院本『注好選』仁平二年（一一五二）点、高野山西南院蔵『和泉往来』文治二年（一一八六）点、高山寺本『古往来』院政末期～鎌倉初期点および金剛寺本『注好選』元久二年（一二〇五）点を選んだ。

本稿では、まず、右四資料の字音点加点密度を見た。

その結果、観智院本『注好選』＜金剛寺本『注好選』＜『古往来』＜『和泉往来』の順に、密な加点がなされていた。その最も詳しい加点が見られる『和泉往来』に口頭語が指摘されていることから、詳しい加点は、比較的容易な漢字にも注を要する加点者によって、あるいは、そのような読者を想定してなされたものではないか、と推測された。

次に、各資料における漢音読注・呉音読注の比率を調査した。

その結果、観智院本『注好選』の字音点には、他の三資料に比して、呉音読注の割合が低いことが判明した。

ところで、和文資料の漢語は、呉音読の方が高率であることが知られている。[20]これと、観智院本『注好選』の呉音読率が『和泉往来』

『古往来』および金剛寺本『注好選』と比べて低いこととを結びつけると、観智院本『注好選』の音注は和文から遠く、他三資料のそれは和文に近い、ということになる。

最後に、四資料の仮名音注を比較したところ、東寺観智院本『注好選』＜金剛寺本『注好選』＜高山寺本『古往来』＜高野山西南院蔵『和泉往来』の順に、日本語音化の程度が大きくなることが確認できた。

これは、別稿における、声調の分析から得られた結果と等しい。声調と音形とは、同一漢字の音を便宜上分けたに過ぎないものであるから、両者の分析結果が一致することは当然である。本稿における分析結果の妥当性は、このような常識的判断によっても支持される。

以上、同期の和化漢文訓読資料の字音にも、日本語化の程度に資料による差が存することが知られた。

ただし、仮名音注のみではわかりにくいが、本稿対象和化漢文資料中もっとも規範的な東寺観智院本『注好選』院政期点も、『蒙求』あるいは『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点と比較すれば、呉音の混読率、mn韻尾の書き分け、唇内入声の仮名表記、等において、非規範的であることを確認しておきたい。

現存資料から知られる日本漢音は、字音直読資料と仏書訓読資料、それらと和化漢文訓読資料との差のように、資料群による差を見せる。

本稿では、その資料群内の各資料間にも漢字音日本語化の程度に差が存することを、院政末期～鎌倉初期の和化漢文訓読資料において指摘した。

注

(1) 「高野山西南院蔵和泉往来について」（『語文研究』第十号、一九六〇年五月）を始めとする遠藤嘉基氏の論文でも、『和泉往来』は、「当時の俗語を混じている」という指摘が有る。

(2) 各文献の調査は、次のものに依る。

高野山西南院蔵『和泉往来』―貴重古典籍刊行会叢書複製本および築島裕編『高野山西南院蔵本和泉往来総索引』（『古典籍索引叢書9』、二〇〇四年、汲古書院）の写真版に依る。なお、明らかな誤字および音注がずれて加点されているものは、訂正した。この訂正は、諸論を広く見た上で校訂・注が加えられている築島裕編『高野山西南院蔵本和泉往来総索引』に主として依拠する。

高山寺本『古往来』―『高山寺本古往来　表白集』（高山寺資料叢書第二冊、一九七二年、東京大学出版会）所収写真版および翻刻に依る。

東寺観智院本『注好選』―『古代説話集　注好選』（一九八三年、東京美術）の写真に依る。

(3) 別稿では、観智院本『注好選』における字音声調を示す声点は、各説話の題目に偏ることを指摘した。全一四五例の声点加点例の内七三・八％にあたる一〇七例までが、題目の漢字に加点されていた。これは、各説話の題目に、人名をはじめとして、初出の語が集中することが主要因であろう。固有名詞および初

見の語には、音を示すべきであるという加点者の意識の反映である、と解釈できる。この点も、観智院本『注好選』の加点における規範的姿勢である、と見られよう。

これに対して、観智院本『注好選』における仮名音注は、全一一〇例中五七例が題目の漢字である。声点ほどではないが、本文全体の一割にも満たない数の題目漢字に、全体の過半数の仮名音注が集中しているのであるから、有意な偏りである。

(4) 「高山寺蔵史記点本の加点態度について」(『高山寺古訓点資料　第一』〈高山寺資料叢書第九冊、一九八〇年、東京大学出版会〉所収。)

(5) 山本真吾「院政・鎌倉時代加点の表白文における施注漢語の性格」(『国語語彙史の研究』二十二、二〇〇二年三月。後、『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』〈二〇〇六年、汲古書院〉に収載。引用は、後者による)。

(6) 小林芳規「訓点における拗音表記の沿革」(『王朝文学』第九号、一九六三年十月)にも指摘がある。

(7) 注(6)小林論文、参照。

(8) 柏谷嘉弘『日本漢語の系譜』(一九八七年、東宛社)、参照。

(9) 論文4では、字音のア行ワ行がハ行表記された例が本資料に存することについて、「このような資料での字音語の発音がもはや原音の姿を止めず、和語と区別のないものであったことを反映している」、と述べる。

(10) この点を、同期の他資料と比較することは、困難である。そもそも、同一の字音が連なる時、その両音を注した例が院政末期〜鎌倉初期の訓点本に希であるため、同期における表記の傾向を捉えがたい。

ただし、現時点で見出した例に、左のものがある。

憤(ヲ)ーヽ(高山寺本『論語』中原本鎌倉初期点　巻第四9)

志士(同右　巻第八25)

志(ヲ)士(高山寺本『論語』清原本鎌倉初期点　巻第八26)

悾(ヲ)ーヽ(高山寺本『論語』中原本鎌倉初期点　巻第四9)

鎌倉時代中期になると、金沢文庫本『群書治要』経部に、「虩(ケキ)(入)ヽ(タリ)」(一308)「龐(ロウ)ヽ(タリ)」(三251)の例が有る。しかし、「濟(セイ)ーヽ(セイタル)」(二78)「趍(ソク)(入)数(ソクニシテ)」(七361)の例も存するのであり、和語との区別は完全には失われていない。

(11) 小林芳規「国語史料としての高山寺本古往来」(論文1)。

(12) 佐々木勇「鎌倉時代の日本漢音資料における濁声点加点について」(『小林芳規博士喜寿記念　国語学論集』二〇〇六年、汲古書院)、参照。

(13) 「春秋」の例は、吉田金彦「高山寺蔵書冊礼について」(『愛媛大学紀要』八巻一号、一九六二年十月)に指摘されている。

(14) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)。

(15) ただし、「衡」は『廣韻』平声濁音字であるため、呉音の濁音形が混入した可能性が考えられる。しかし、「衡」字には、呉音読資料中でも単声点加点例しか見出せない(『貞元華厳経音義』)。よって、本資料の掲載例が呉音の混入例であるとしても、やはり連濁例と見なければならない。

(16) 他に「雍州」(四オ2)が有る。しかし、この時代、オ・ヲが音形の差を表わしていたとは考えがたいため、同列には扱わない。

(17) 他に「金烏」(四七ウ2)が有る。しかし、前注と同じ理由で、論文本文には挙げない。

(18) ただし、本文の漢字連続を「〳〵」で繰り返した「努力〳〵」(91.12)の例が有る。ここは、「ゆめゆめ」と訓じるべき箇所であり、その和語の繰り返しを示すために、「〳〵」が用いられたものと解釈される。

(19) なお、金剛寺本『注好選』は、本文書写においても、観智院本『注好選』に比べて、整っていない。一頁七行を基本としつつも、六行・八行の頁も有り、一定しない。また、題目に続けて、改行することなく本文が始まっている。訓点にも、誤写が目立つ。

(20) 注(8)柏谷著書、参照。

[付記] 江端義夫先生は、拙稿を御覧下さるたびに、ご意見と励ましのお言葉とを書面にしたためてくださいました。広島大学の職を離れてもご健康に留意され、われわれ後進をお導き下さいますようお願い申し上げます。

(広島大学)